

2022年9月11日
建まちセミナー2022 in茨城

今こそ私たち建築家は、専門家の立場から わが国の“集住空間”のあり様を改めて 問い直そう

建築家 藤本 昌也

●師匠 建築家・大高正人のメッセージ

●建築家に求められる一番大事なことは“基本的スタンス”だ。建築は人間を幸せにするためにある。その原点を見失うことなくブレないで活動することだ。

●最高裁の仕事と基町団地の仕事のどちらを取るかと言われれば、私は基町団地の仕事を取っていたと確信を持って言える。基町の仕事は一般性があり、社会性がある。困難な都市問題との闘いを内包している。

●1972年 現代計画研究所 設立

●基町団地の仕事を通しての師匠大高の言葉である。人々の生活世界を建築家の主戦場と覚悟を決めての重い発言だと私は受け止めた。

●師匠大高のもとでの10年の修業を終え、独立した。師匠大高の薫陶を踏まえ、常に時代と社会に向き合い、「住まい・まちづくり」のフィールドを中心に、建築家として活動を広げたいと決意しての独立だった。

● 広島県基町高層アパート

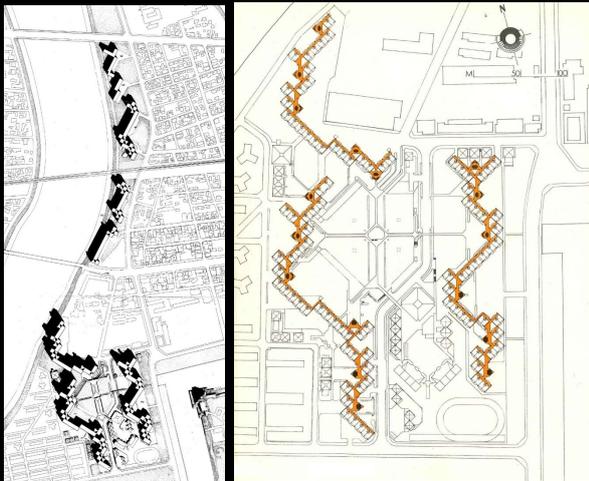
1968
2009

● 広島戦後を終わらせる最後の原爆スラムを解消する

● 「超建築」実現のための5つの提案
(住宅の立体化ではなく、街の立体化を目指す)



連続する「立体街路」



高層板状ツイン型住棟



● 1965年以降の住宅公団による面開発団地



街を内包する「都市的施設群」





街に開く全棟「ピロティ方式」



屋上庭園



「群造形」として景観づくり

1970年代の<社会状況>

- 沖縄本土復帰(72年)
- 田中角栄内閣誕生(72~74年)
 - ・ 日本列島改造論
 - ・ 年金福祉政策の充実
 - ・ 緑農住区構想
- 日中国交回復(72年)
- オイルショック(73年)(第4次中東戦争)

● 議論の場「日本土人会」を立ち上げる (73~74年)

<メンバー> 建設省行政官、建築家、都市プランナー、彫刻家、評論家、大学研究員等

<テーマ> 議論の出発点は、これまで当然のごとく受け入れてきた西欧の近代主義を相対化し、今後われわれがその西欧近代とどう向き合うのか、その拠って立つ新たな基本理念を見つけることにあった。そして、それは日本独自の文化を培った日本の風土の中から見つける以外にないというのが土人会の仮説であった。



昔のままの環濠の姿を残し、変化に富んだ路地空間を有する集落

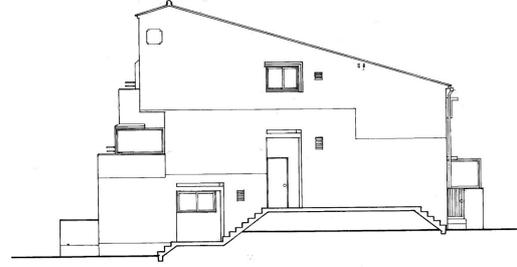
奈良県稗田村



奈良県稗田村

●茨城県営六番池団地(90戸)
ーコモンガーデンを核にー

1975
1976



<囲み型コモンガーデン>



< 傾斜屋根 >



< 路地階段 >



< 屋上テラス >

●茨城県営会神原団地(192戸)
一団地から街へー

1977



茨城県営会神原団地(1977)

1980年代の社会状況

- 竹下内閣(ふるさと創生事業)(87~89年)
- バブル経済と崩壊(88~92年)
- 元号<平成>の時代に改元(89年)
- ベルリンの壁崩壊(89年)

1980年代の私の<仕事>

<新戸建住宅地づくり>への挑戦

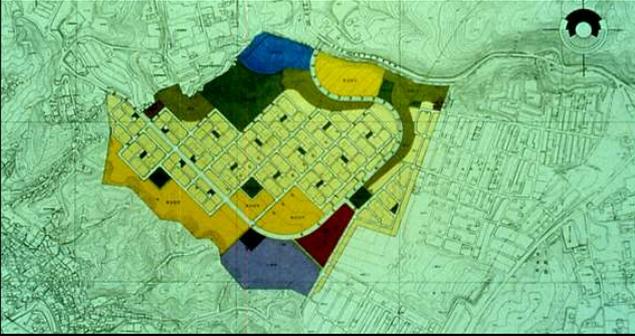
- 岐阜県多治見市<滝呂団地>(81年)
- 三田フラワータウン<アルカディア21>(87年)
- 三田フラワータウン<高規格住宅>(88年)

<ものづくり>の視点からの挑戦

- 家づくり85<民家型構法>の提案(85年)

● 岐阜県多治見市 滝呂地区団地
—新戸建住宅地づくりへの挑戦—

1981
1984



● 新戸建住宅地づくりへの提案(背割宅地形式からの脱却)



● 土木計画と建築計画の一体作業(宅地構成の工夫)



● <4.5M道路><プランタゾーン><ポケットパーク>の提案



● 住民参加による多様なポケットパークづくりの提案

●兵庫県フラワータウン アルカディア21
—公園住区型住宅街区づくりの試み—

1987



●税制上の工夫による共有公園スペースの確保



●つくり過ぎないランドスケープデザインの工夫



●彫刻家の参加によるメタフィジカルな空間づくりの工夫



● 共通素材(石材)の活用による公・私空間の融合



● 中国石材の合理的調達工夫

＜もの＞づくりの視点からの取組み

— 地域を元気にする“地産・地消”を考えた
《民家型構法による木の香る家》づくりの提案 —

石神井の家
— 民家型構法の提案(1982) —

林野庁のモデル住宅 「国産材ハウス」

— 日本の木で 日本の技で —
日本の家をつくる試み
1985年
（“家づくり85”提案競技入賞）



真壁構法の家づくり

岩手県遠野市木工団地建設 — HOPE計画の取組み —

— 山村と都市の地域連携に向けての —
川上側の一体化の試み

1994年～2001年



遠野地域木材総合供給モデル基地<木工団地> (26.5ha)

岩手県遠野市宮鶯崎団地

— 川上、川下の連携の実証実験の試み —

1998年



36戸の現代集落づくりの試み(計画地 11,783㎡)



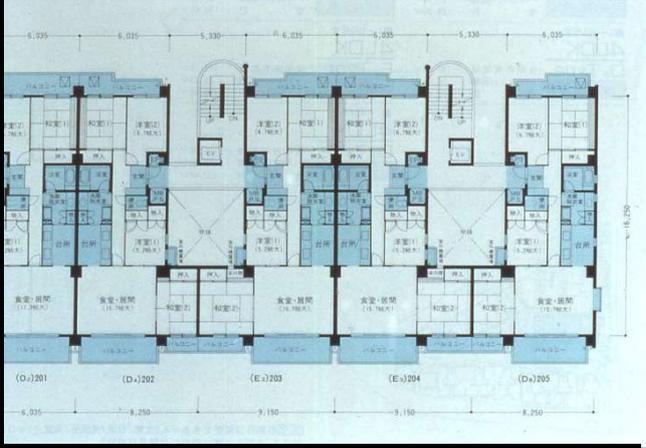
人々のふれ合う“絆”の中庭



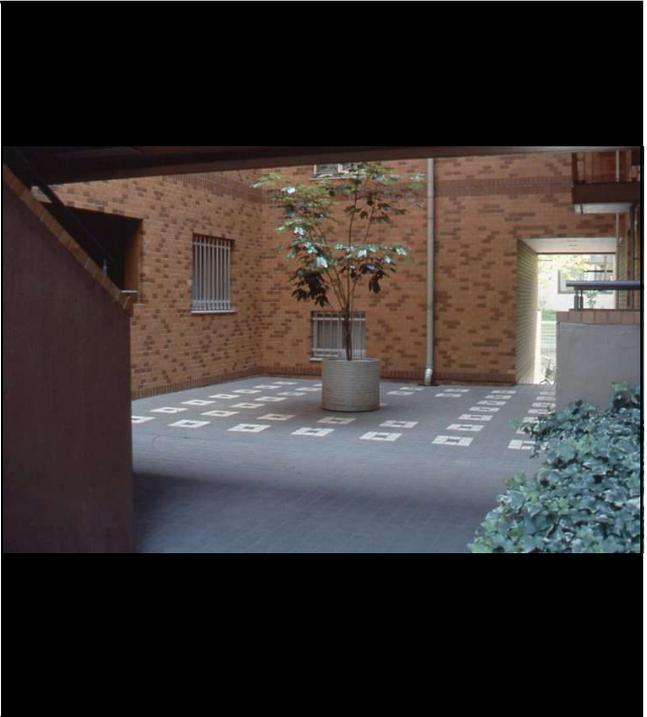
人々のふれ合う“絆”の中庭

<p>1990年代の<社会状況></p>	<p>1990年代の<私の仕事> — 平成の時代の始まり —</p>
<ul style="list-style-type: none"> ●ベルリンの壁崩壊(89年) — 冷戦終了、グローバル化進む — ●バブル崩壊(92年) — 失われた20年の始まり — ●阪神・淡路大震災(95年) ●オウム・サリン事件(95年) 	<p><コープ住宅づくりに挑戦></p> <ul style="list-style-type: none"> ●多摩N. T コープタウン<ヴェルデ秋葉台>(89~90年) <p><都市デザインの実践></p> <ul style="list-style-type: none"> ●多摩N. T ベルコリーヌ<10番街>(90~92年) ●多摩N. T 学園地区21住区(94年) ●千葉県幕張ベイタウン計画・設計調整者として参画 (4街区の計画・設計担当)(1992~2012年)

	<p>●多摩NT ヴェルデ秋葉台 — コープタウンづくりへの挑戦 —</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">1988</div>
<p><くらし>づくりの視点からの取組み</p>	
<p>— <生活者参加>重視の住まい・まちづくり (コーポラティブハウス)の提案から始まった —</p>	



多摩NT ヴェルデ秋葉台 (1988)





千葉幕張ベイタウン

- 1995年 パティオス4番街 (敷地面積5,645㎡ / 110戸)
- 2002年 パティオス21番街 (敷地面積8,787㎡ / 200戸)
- 2006年 ファーストウィング (敷地面積15,800㎡ / 410戸)
- 2007年 ブエナテラーサ (敷地面積11,179㎡ / 290戸)
- 2013年 グリーナ (敷地面積19,084㎡ / 450戸)

全体図 (街区面積837,300㎡ / 9,000戸)



幕張ベータタウン・パティオス4番街（坂本一成・松永安光）



幕張ベータタウン・パティオス4番街（坂本一成・松永安光）

（V）2000年代の＜社会状況＞

- 景観法の施行（04年）
- リーマンショック（08年）
- 政権交代（09年）
- 100年に1度の世界同時大不況

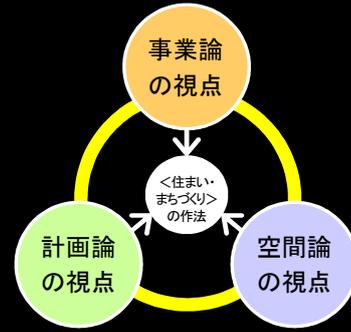
2000年代の私の＜仕事＞

- ＜“まち中居住再生”への挑戦＞
- 宇部市まちなか再生事業＜宇部プロジェクト＞への取り組み（1999～2018年）
- ＜“田園街区再生”への挑戦＞
- 新田園都市＜つくばプロジェクト＞
（2002～2016年）

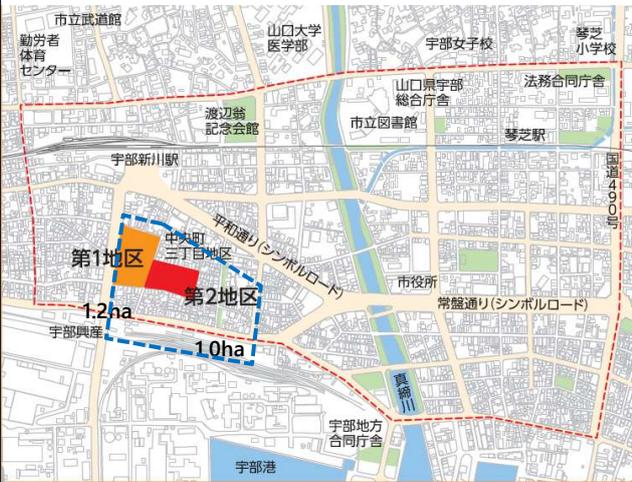
私の〈住まい・まちづくり作法〉の提起

- 〈計画論〉居住とサービスのあり方を提案する
- 〈空間論〉計画論を受け止める都市空間、建築空間のあり方を提案する
- 〈事業論〉上記2つの提案を実現可能とする事業手法を提案する

私の〈住まい・まちづくり〉作法



●〈宇部プロジェクト〉第1期(2000~2008年)

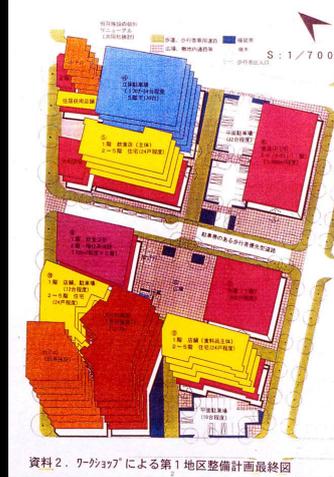


山口県宇部市中心市街地再生事業(2000~2008)

商業コンサルによる構想
(1998)

1.3haの地区を等価交換方式による再開発的な手法で解いており、権利関係が複雑で権利者の意向も多岐に渡ったこの地区では、計画が一步も進まなかった。

山口県宇部市中心市街地再生事業(2000~2008)



資料2. ワークショップによる第1地区整備計画最終図



山口県宇部市中心市街地再生事業(2000~2008)



山口県宇部市中心市街地再生事業(2000~2008)



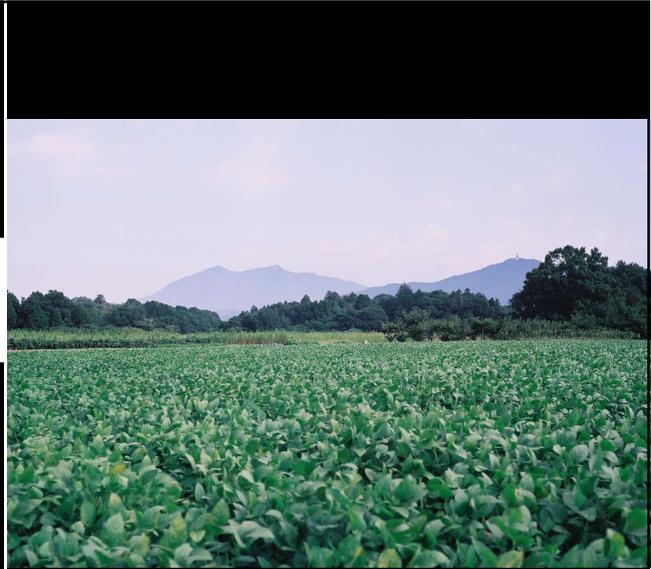
山口県宇部市中心市街地再生事業(2000~2008)



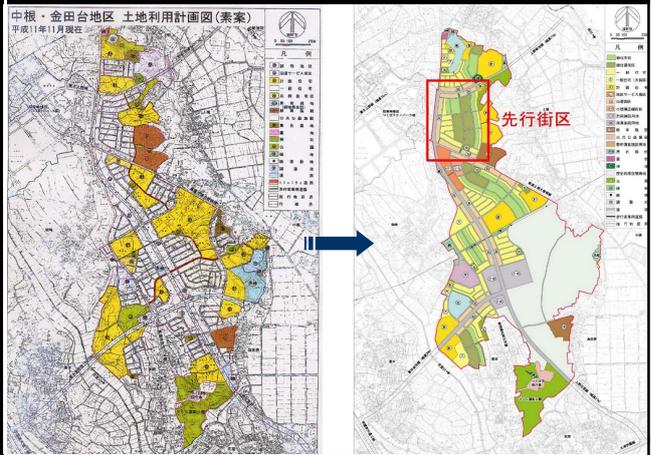
茨城県つくば市 春風台住宅地[82戸・6.1ha]

— 土地区画整理事業による
“新田園都市”づくりの試み —

2004年～現在
(第1工区約80宅地2012年街開き)



筑波山を望む計画地 (190ha)



土地区画整理事業計画変更 (2004.5)



緑住農街区と緑住街区



土地利用計画



春風台住宅地の現状 (2017.7)



春風台住宅地の現状 (2017.7)

静岡県静岡市
池田の森農園クラブ
[35戸・1.3ha]

農ある暮らしを実現する
— エコロジー団地づくりの試み —

2002年

農ある暮らしを実現する
〈エコロジー団地〉づくり

エコロジー団地 池田の森は
300坪の農園の周りに、
35区画の戸建住宅、ショップ、オフィスを配した住宅団地
2004年入居開始



団地の内側は界隈を感じる場所
住人はコミュニティを強く意識する

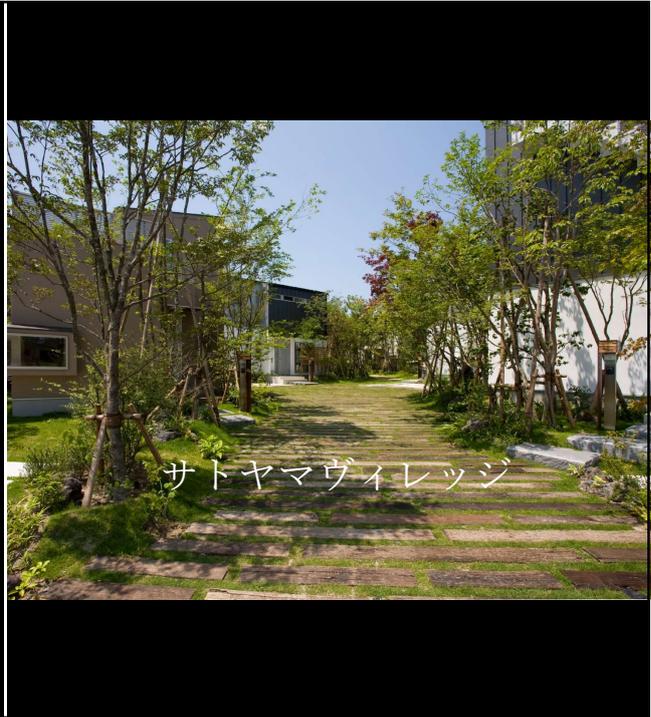
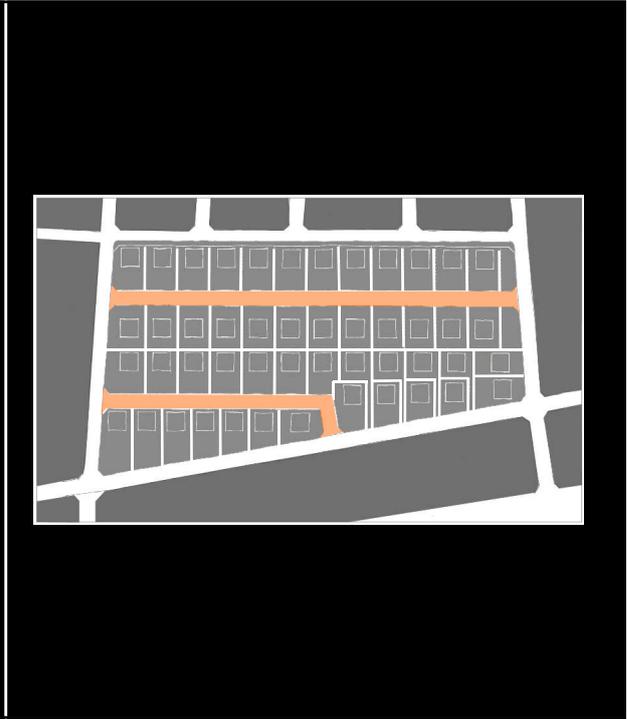
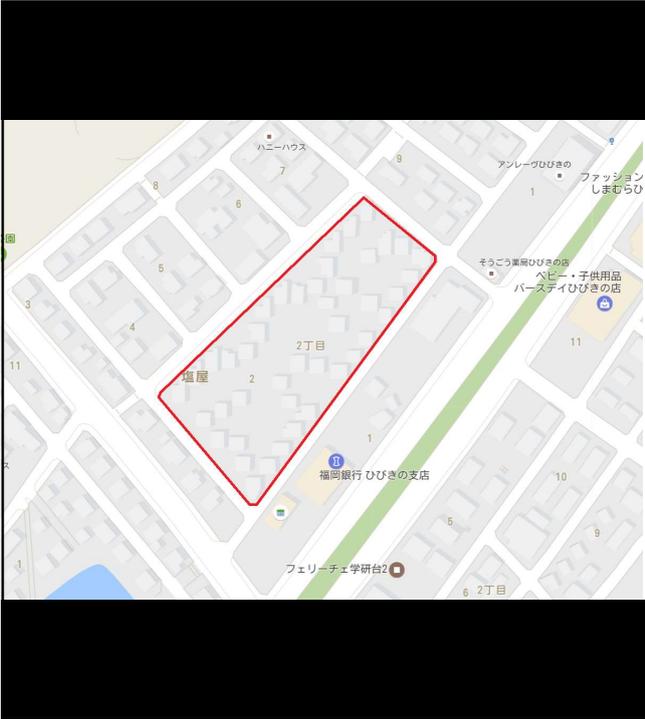


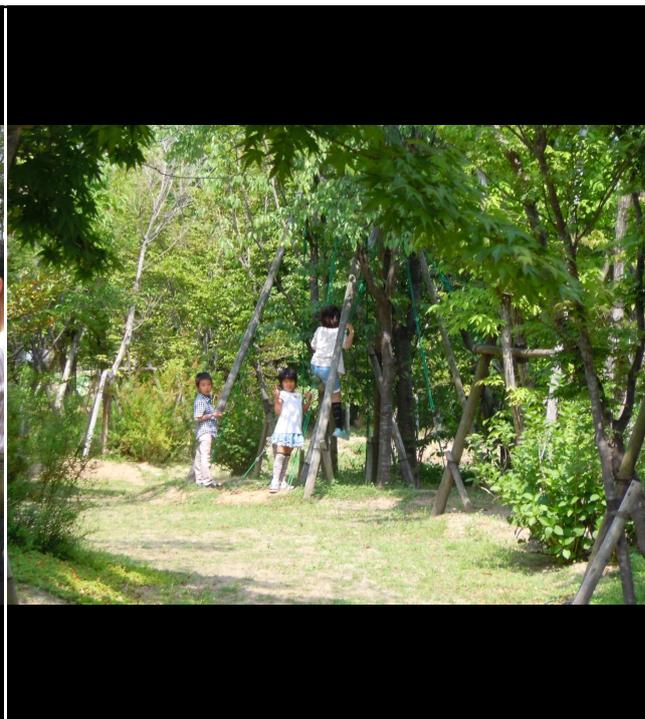
福岡県北九州市
サトヤマヴィレッジ
[43戸・1.2ha]

— コーポラティブ方式による
“里山”を共有する住宅地づくりの試み —

2008年

人と自然の関係性を問い直す
<新里山集落>づくり





●2020年以降の〈都市再生〉時代にどう向き合うか

考えてみれば、わが国の20世紀後半は、高度成長を背景に、「建築」づくりを謳歌した時代でした。しかし、それは一方で、「建築」をつくり過ぎ、貴重な建築遺産や豊かなオープンスペース、緑を失った、ゆとりの無い建築過剰時代でもあったのです。

超人口減少化時代を迎えている今だからこそ、私たちは、「空地」こそ最大の価値」との思いを共有し、「空地」を主役に、魅力的な都市再生に取り組みたい。

●ポストコロナ時代を踏まえて“新ローカルイズム”を再確認する

ポストコロナ時代とは、“人と自然”“人と人”との関係性を抜本的に見直す時代と考えています。

現代文明は確かに私たち社会に多くの貢献を果たしてきました。しかし、同時に“自然”への傲慢な態度や人への偏見、差別化を繰り返し、多くの誤りも犯してきました。

私たちは、先ず、この人間の驕りがもたらす事態を想像する力を持つ必要があるのではないのでしょうか。